



『無形の心で』

茨城県

十王町武道振興会

中学3年生

幕田

熙

世の中には、有形と無形の二つの形があります。文化財にもこの二つがあり、有形文化財とは、「建物・芸術品などの形のあるもので、芸術上価値の高いもの。」とされる一方、無形文化財は「演劇・音楽などの無形のもので、芸術上価値の高いもの。」とあります。僕も日光の東照宮や、日立風流物などを見学しましたが、どちらにも共通して言えることは、人の心を動かす力を持っていることでした。

剣道で例えると、有形とは構え、打突そして残心であり、無形は風格、気位などが当てはまるのではないかと思います。力強い打突はもちろんのことですが、立派な構え、気品ある礼や立ち姿は、僕の心を引きつけます。

今までの僕の弱点は、手を挙げて対戦相手の打突を防御することでした。大事な試合になると悪い癖が出て負けてしまい、チームを勝利に導くことができず、大将として悔しい思いを幾度となく繰り返してきました。

ある日の稽古で、

「左拳の動きは心の動きである。手を挙げるのは打突するときのみ。剣道を学ぶ心ができていない。」と先生に指導を受けました。確かに僕が手を挙げ防御するときは、剣道本来の姿とは異なる勝つことのための結果を重視したときでした。同時にそれは、自分の剣道に対して自信が持てないことの証でもあったと思います。

「心ができていない。」

打突における姿勢の崩れなどは修正し、ビデオを使用して確認することも可能です。しかし、心は目に映りません。まず僕は心の意味を辞書で調べてみました。するとそこには、「人に備わった感情、精神の働き。」とあり、更には「色々な感じ方で気持ちが揺れ動くこと。」と補足されていました。それはまさしく剣道における四戒といえるものでした。

「驚き、恐れ、疑う、惑う。」

一つでも心に生じたときは、実力を発揮することは不可能です。今までの誤った剣道観と弱い心が、有形の動きへと変化し、左拳を動かして、手を挙げさせていたのだと思います。そしてやっと僕の課題が見つかりました。「心を強くしたい。」

僕は、この欠点を克服するため、「懸命」に稽古に励むことにしました。懸命とは命を懸けて物事にあたることです。剣道が他のスポーツと一線を画する大きな理由はここにあるのです。本来の刀を使用した戦いでは、手を挙げて防御すれば腕を切られるのみでなく、命を失うのです。その日からは恐くても決して手を挙げての防御はせず、機会には前に打って出る稽古をするよう心がけました。

僕が剣道を始めたばかりの頃、父は、

「剣道はABC。特別な取り組みをするよりも、(A)あたり前のことを、(B)ばかにせず、(C)ちゃんとやる。長い年月をかけ、この努力を積み重ねれば、それが自らの本物の力となり、やがて自信に変わっていくものだ。」

と言い聞かせてくれたことを思い出しました。

確かに剣道は厳しい日々の稽古によってのみ高まり、一朝一夕で完成するものではありません。正しい心構えと正しい稽古を積み重ねることによって、はじめて真の強さが備わり、自信の裏打ちにも

つながるのだと考えます。そして、これを習得した剣士のみが、試合や所作などにおいても、兼ね備えた風格や美しさを表現することができるのではないかと思いました。それから僕は、その心構えを胸に、今日も「懸命」に稽古に打ちこみ、少しでも心が強くなれるよう努めています。

形ある物は、いつかは目の前から消えてしまいます。しかし、無形の心は消え去ることはなく、その人の中に生き続けます。

「剣は心なり。心正しければ剣また正し。」

そしていつの日か、対戦相手の心を動かし、審判、そして観衆の心にも響く一本を打ってみたい。僕の培った「無形の心」で。